

■ほまれが痴漢師を懲らしめようとして 返り討ちに遭い痴漢奴隷になる話

◆返り討ち

元 天才フィギュアスケーター、輝木ほまれ。
成長期で急激に身長が伸びたことが理由でうまくジャンプできなくなり、それをきっかけに引退した彼女。
だが、スケートを辞めた真の理由は、別に存在していた……

それは、スケーター時代のとある夕暮れ。
厳しくも楽しい練習を経て、帰宅しようとしていた時のことである。

(あれ……もしかして、痴漢……?)

共に練習している友人のスケーターが物陰にいるのを見たのだが……
彼女は人目のつかない場所で、男二人に挟まれていた。
父兄との仲睦まじい会話などにはとても見えない。
男二人……太った中年と小柄な少年の手付きは何故か友人の胸部や下半身に伸びており、
更には友人の苦悶に満ちた表情。
それらが、痴漢被害の真っ最中であることを物語っていた。

「ちょっとアンタら、何してんの！」

痴漢行為、ましてや友人の危機など放っておけるはずもない。
勝気で身体能力の高いほまれは男相手であろうと怯むことなく向かって行く。
今までも似たような経験が何度かあり、年上だろうが大柄だろうが、人としてなっていない者には
遠慮なく物を言い、そのたびに相手を言い負かし、追い払ってきた。
今回も今までと同じように、痴漢を追い払おうとし……

——……

————……

ぎゅむうっ♥ ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅううっ♥

「あっ♥♥♥ んおおおおっ♥♥♥」

……見事なまでの返り討ちに遭っていた。

痴漢の少年と中年。彼らの精神、体捌き、

そして痴漢のテクニックは、ほまれの常識を遥かに超えていた。
友人を逃がせたまではいいものの、痴漢はほまれの一喝にも全く動じず、
むしろターゲットをほまれに切り替えた。
目にも止まらぬ速度で動き、一瞬の内にほまれの性感帯を刺激。
膨大な経験を積んだ巧みな刺激は性の知識や経験がなくとも
性徴期——発情期であったほまれには極めて強烈であり、
瞬く間に陥落。
初めての性感と絶頂をほぼ同時に味わわされ、
牝としての本能に目覚めさせられれば雄に抵抗できるはずもなく、
ほまれは友人の代わりに痴漢たちの新たな餌食になるのだった……

◆痴漢調教

ぬちゅっ♥ むにゅっ♥ もみもみもみもみっ♥♥

「あっ♥ つっあ♥ もうっ、いいでしょっ♥ そろそろ……練習……あはっ♥♥」

【ああ悪い悪い。あんまり善がるもんだから練習サボるつもりかと思ったよ】

【ほまれさん、おっぱいもお尻もいじめてあげるたびにドスケベになってくもんね。
お金あげるからもうスケート辞めよ？】

「そんなわけ……ないでしょ……っ♥ バレたらマズいから……もう、帰って……！」

スケート練習を控えていながら、またあの痴漢二人に身体を触られ、
何度となく牝の悦びを味わわされるほまれ。
あれからというもの、この痴漢二人には痴漢被害時の映像などをネタに脅され、
毎日のように調教されまくっていた。
性徴期であったことも手伝い、身体はみるみるうちに淫らで美しく発育。
少年の言葉を否定したものの、見るからに大きく丸く実った乳尻は圧巻であり、
以前はともかく今や痴漢御用達と言って差し支えないものになっている。
実際に男の理性を狂わせるのか、痴漢以外からも好奇の目で見られることが増え、
視姦やセクハラも当たり前のようにされる日々。
フィギュアのコスチュームを着れば胸と股間にシャッターが浴びせられ、
不本意な形でスケートへの意欲が削られていく。

そして決め手となったのが……固定バイブを強制されての大会出場だ。

「こっ、こんなモノを着けて演技なんてできるわけないでしょっ！！」

【いいのか？ なら今までの画像も映像も全部ネット上にバラまくぞ】

【今一番メディアが注目してるから、一気に有名人になっちゃうね！】

「っ！ スケートの邪魔だけはしないって約束でしょ……！ わたし、何のために今まで我慢してたのよ……！」

【我慢なんかしてないだろ、ノリノリで痴漢されまくってたクセによお！】

ぐちゅっ♥

「あっ♥♥」

【演技前なのにこんなに濡れてるの？ やっぱりドスケベオマンコじゃん♪】

【命令聞かねえなら今すぐバラまくぞ！ 痴漢潮噴きアクメ世間に晒していいのか?!】

ぐちゅうっ♥ ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅうっ♥

「お、わかった♥ わかったから♥♥ やめっ♥♥ んおおんっ♥♥」

【どうせ内心では期待してんだろ？ 神聖なリンクの上でバイブアクメ全世界に晒して来い!】

ずぶうんっ♥ ヴヴヴヴッ♥

「んひっ♥♥ そんなっ♥♥ 一気にいいっ♥♥♥」

了承した途端、コスチュームの股間部がズラされ、バイブが挿入される。
痴漢の愛撫、そして何よりほまれの内なる欲求により柔らかくほぐれた肉壺は
すんなりとバイブを受け入れ、小さな震動にも敏感に反応して軽い絶頂に達してしまう。
最も大事な場所であるスケート場、演技の直前。
神聖な空間での淫行が不覚にも昂揚をもたらし、
愛液どころか唾液まで垂れ流しそうになるのを慌てて防ぐ。

【胎くくって行ってこいや】

【ま、我慢すればいいだけだから。トリプルアクメだっけ？ 演技がんばってね〜♪】

◆トラウマと引退

『続いて、輝木ほまれ選手の演技です!』

「ふ……っ♥♥ ふ——……っ♥♥」

(音は……小さいし……♥♥ 濡れてるのも♥♥ 汗……かくから……バレないよね……♥♥
大丈夫……イける……っ♥♥)

身体にフィットするコスチュームであるため、観客たちに悟られないよう
バイブはほぼ完全に膣内に食い込まされている。
そのため挿入・震動、共に衝撃は大きい、流石に痴漢たちも鬼ではないのか
バイブのサイズはやや控えめで、震動威力も同様に弱くされている。
これなら何とか演技終了まで堪えることができそうだ。
といっても、やはりかなりギリギリで、気を抜けばすぐにでも『決壊』しそうだが。

(ジャンプさえ出来れば、何とかなる……! 慎重に……っ!)

ギョルルッ! タンッ!

「っっ♥♥」

『華麗なジャンプが決まる! 表情もどこか楽しそうです輝木ほまれ!』

演技最初のジャンプ。最近伸びが伸び、
痴漢調教で牝肉も発達してきたため難しくなってきたが何とか成功。
しかし、身体をひねり、高速で回転し、そして着地する——
その刺激は想像以上に膣内に響いてきた。
ひねりではバイブがねじれたようになり膣壁を掻き乱し、

着地の衝撃はバイブを奥へと突き上げ、より深い快楽を叩き付けてくる。
解説者が楽しそうと言った表情も性感がゆえにアヘリかけているからであり、
実態はとても美しさなどとはかけ離れていた。
それでも、持ち前の体力、痴漢調教により逆に鍛えられた快楽への耐性で踏みとどまり、
ほまれは次のジャンプに挑む。しかしその時、不運にも痴漢たちと視線が合ってしまう。

「——っっ♥♥」

(み♥♥ 視てる♥♥ 視られてる♥♥ あいつらに♥♥
それだけじゃない♥♥ 他の男も♥♥ カメラも……っっ♥♥
まさか……バイブ♥♥ バレて……っっ♥♥)

当然ながら、観客も中継カメラも容姿と能力に優れるほまれの演技に注目している。
だが痴漢の邪な視線を知覚したことで、他の視線も全てそういう意図があるものではないかと思いついでしま
う。

それどころか、バイブを挿れたまま演技していることがバレているのではないか。
その不安がただの視線をほまれにとっての視姦へと変え、峻烈な快感を得てしまい——

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴッ♥♥

「んおっ♥♥♥」

(バイブが♥♥♥ 強くっっ♥♥♥
み♥ 視ないでっ♥♥ あっ♥♥♥ イクっ♥♥♥
トぶろうう……………っっ♥♥♥)」

更にバイブの震動が最大にまで引き上げられる。
痴漢が最悪のタイミングを見計らってリモコンを遠隔式スイッチを押したのだ。
視姦とバイブの刺激に耐えられなくなったほまれは遂に絶頂。
当然ジャンプどころではなく、体勢を崩して派手に転倒してしまう。
怪我を負い、演技が中断される騒ぎになる中、
ほまれはただバイブがまだ挿入されていること、
そして神聖なリンク上で絶頂してしまったことがバレないか、
それだけを恐れ、股を閉じて身を縮こまらせるのだった——